

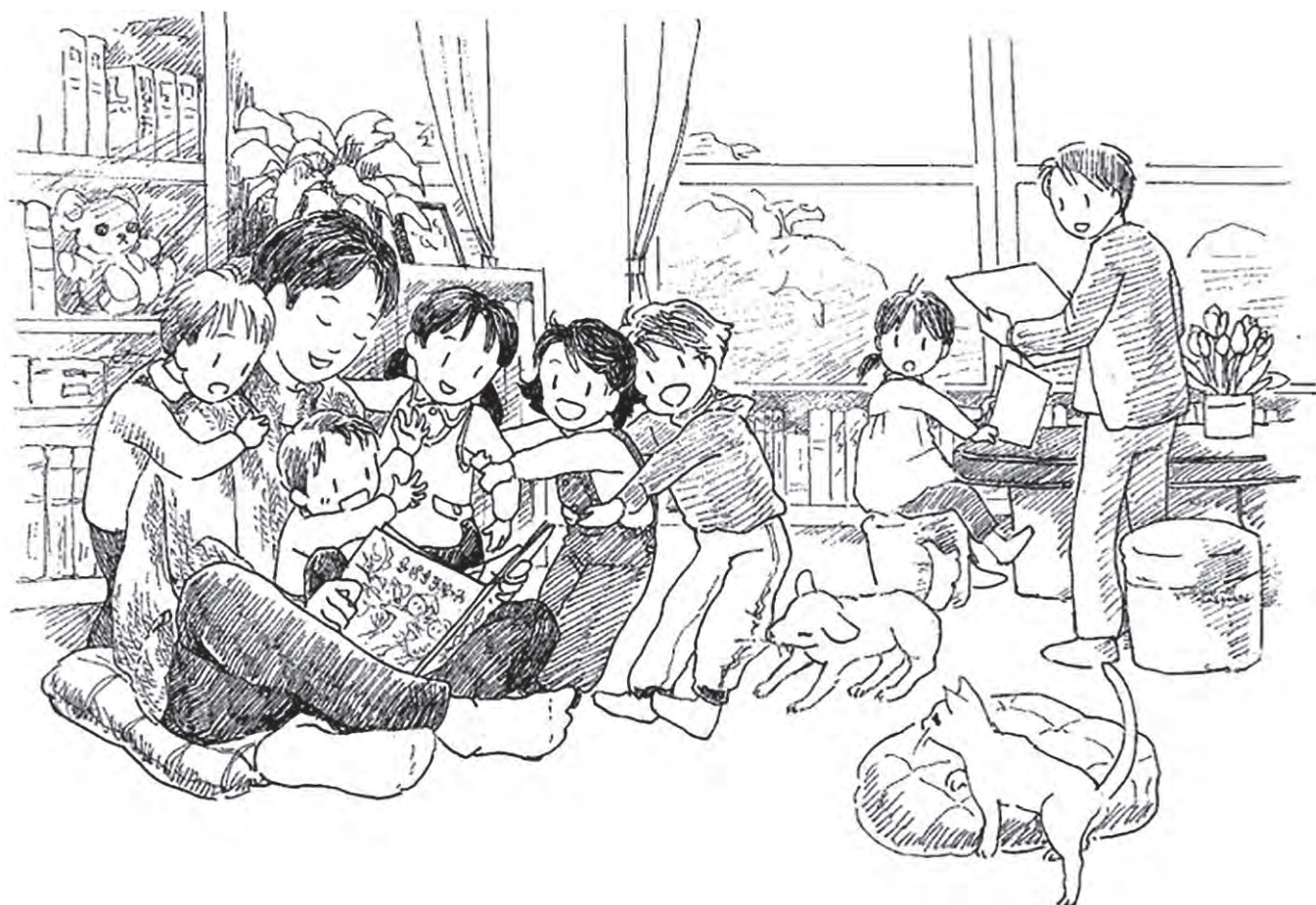
ひかりのこ

光の子



No.209 2023.4.7

●年間聖句 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。
(ローマの信徒への手紙 8 章25節)



「育 み」

表紙絵・中島 由起子

武州紺

落合 水尾

(「浮野」主宰)

煮大根友を案じて届けけり

探梅をかねて一灯山に問ふ

頼もしき炭焼の火を一人守る

目高の子小さく生まれたる光

野の春のすべては空の武州紺

山の気を水の気として利根の春

すかんぼや大根の気に安んじる

別れと出会いの季節に

施設長 竹花 信恵

厳しい寒さを越え、やわらかな春の日差しが差し込みます。つぼみも膨らみ花が咲くこの時に、光の子どもの家での暮らしの区切りを迎え、今年は2名がこの光の子どもの家を卒園致しました。ふたりとも高校を卒業して、進路を定め、次の道を歩み始めます。先に向かって、新たな日々に向かってというメッセージを込めて、私たちは「出発（たびだち）の会」と名付けてお祝いしてきました。

幼児期から15年の月日をここで過ごした子、また大きくなってから仲間に加わった子と両方います。それぞれにずっと関わり続けた職員たちなので、その分抱えきれない泣き笑いのエピソードが積み重なります。期間の長短はありますが、どちらにしても大切な日々を共に過ごさせてもらいました。ここでの暮らしが短い場合には思い出など作れ

なかつただろう、という心配は皆無であり、人間の存在の重さをずっしりと感じさせてもらえる日々でした。お世話になった方々のほんの一部しかお招きできませんでしたが、皆さまに見守られ、感謝をお伝えできる機会をもててよかつたと思います。

社会も18歳成人の時代です。でも18歳で自立、ということは、どんなに難しいか、自身をふりかえっても並大抵ではないことがわかります。

ここ数年は、子どもたちが、大学や専門学校に進学を望めば、あるいは子どもたちに意欲があつてやりたいことがある、ある程度自立の見通しがあるなら、おかげさまで応援してくださる方々も多くその支援は手厚い時代にもなつてまいりました。また、さまざまな事情が認められ措置延長として、ここに居続けることができる期間も保証されるよ

うになつてきました。

でもそうでない子どもたち、「社会にでて一人暮らしをしていく」、「夢に向かって一歩踏み出す」ことにはこの時点では行き着かない重さを抱えた18歳たちが増えているのが事実です。残念ながら光の子どもの家に居続けられ何とかなる、何か身につけられということではないので、その子どもたちの「この先」が今、最も大きい課題です。

卒園という区切りは、自立の準備が整ったからという事より、次の支援に結びつけること、ここを出た後の支援の準備をすすめることという重要な判断をしながらも、つな

げていくための分離、という意味をもつことなのかもしれません。応援は続きます。

単にアフターケアへの移行ということではなく、バトンを誰に渡すか、それを見極めていくことが大きな仕事、役割であることを改めて感じさせられています。18歳成人、22歳までの措置延長も、支援の年齢制限撤廃も、児童手当の問題も、子ども家庭庁の創設もそれぞれがニュースになるたびに、どのようにそれを活かしたら、子どもの利益につなげられるだろうかと考えさせられています。

また、新たに幼い子どもたちの入所が相次いでいます。2歳、3歳、4歳、5歳、そんな生まれて間もないような年齢のひとりひとりに、すでに今に至る前の状況、彼らなりの重さを抱えてやってきたことを感じています。この家の創立時は、まさにみんな幼くて、保育園のような状況でしたが、今は、みるたびに大きくなる様なお兄さん、お姉さんたちの中での暮らしに幼い子が迎えられる状況です。年齢が10歳前後の子どもた



2月、園庭で雪遊び

ちは、「えー、また、小さい子？」という感情をぶつけてくることもあります。見た目が職員より大きくなった高齢児もそうです。職員が自分を見てくれなくなってしまうのでは、自分と遊んでくれる時間が減ってしまうのでは、など思っている様子で嫉妬心もストレートです。

そんな気持ちも全力でぶつけてくる子どもたちを精一杯うけとめてくれる職員と、なんとと言ってもいつの間にかたくましく成長している子どもたち自身の受け入れる力に助けられて、また光の子どもの家のにぎやかな新年度が始まりました。これからも応援よろしくお願いいたします。

なぜコロナは蔓延したのか？

——いま私たちが学ぶべきことについて——〈前半〉

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

2023年1月末、この原稿を書き始めたちょうどそのとき、政府は新型コロナウイルス（以下コロナ）を来る5月8日に感染症2類相当から5類に変更する方針を発表した。コロナに関する規制が緩和されることになるが、これは、コロナが弱毒化して心配がなくなったことを意味するわけではなく、高年齢や基礎疾患を持つているコロナ罹患者にとっては、重症化の危険性は依然として残っている。政府の方針変更の主眼は、あ

くまでも、コロナによる社会状況の更なる悪化を食い止めることにありと見なければならぬまい。

コロナが中国で発生してから4年目に入るが、ウクライナ戦争と相まって、世界、というよりも地球は今大きく揺らぎ始め、その行方は定かでない。この時点で、ウクライナ戦争だけでなく、コロナの発生も人間が引き起こしたもので、その責務は、すべて我々人間が負わなければならぬのではないかと私は思



青毛堀川で河津桜と菜の花を見る

う。物騒な言い口ではあるが、地球温暖化を始めとする人間を介した地球の変様の一つとしてコロナを位置づける必要があることを強調したのである。

以前「光の子」に、コロナウイルスは、コウモリの体の中で、その生体を傷付けることなく、サイクルを回していたのに、人間がノコノコと、コウモリの住む森に入っていないからいけないのだと述べた。しかし、この記述ではあまりにも概念的で、コロナの実態を示してはいない。

最近、Natureという世界有数の科学機関誌に、感染症が具体的にどのような形で蔓延して

いくのかに関する論文が掲載された。この論文は、感染症に関する重要な視点を示しており、一般の方々にその内容を解説することは、コロナに對する対応として、私のような立場にいる人間の現時点での役割ではないかと合点し、その仕事に取り掛かった。しかし、私の従来の専門分野と違う分野の研究でもあり、整理してまとめるのはなかなか困難であった。途中で止めるわけにもいかず、この3か月間多くの時間をそれに費やしてきた。あまり、自信はないが、以下に勉強したことを紹介することにする。

コロナウイルス（正確にはSARS-CoV-2）がどのような経路でヒトに伝搬されたかは議論のあるところではあるが、最近の遺伝子検索から、コウモリのウイルスがSARS-CoV-2の祖先であることが明らかにようになってきた。とすれば、コウモリとヒトを繋ぐ道筋はどのようにして形作られていったのか、具体的な証拠は何も得られていない。ところが、前述のNatureの論文は、コロナとは異なる感染症

の話ではあるが、ウイルス感染症において、ウイルスが伝搬されていく道筋について、環境変化のウイルス保有宿主に与える影響などを中心に具体的な証拠を示している。

発表された論文の内容は、なんと25年間に渡る研究結果を纏めたものであるという。私も、医学基礎研究に約40年間従事し、それなりに他人の真似ではない新しい研究結果を発表してきたつもりである。しかし、一つの論文にまとめ上げる研究に費やした時間は、長くて3年くらいで、3年も経って結果が出ない場合は、その研究はお蔵入りになってしまう。大体そんなスパンで研究は回っていく。ところが、件の研究では、25年かかってようやく一つの結論が得られたというのである。なんとも凄い話ではある。

しかし、考えてみると、自然環境の変化の観察をベースにした研究ともなると、自然環境が年単位で急速に変化するわけもなく、やはり、十年単位の研究になってしまうのかもしれない。そして、25年も費やしたこの研究の説得力は相当なものであり、このような重量級の仕事の積み重ねによって、我々人間が、地球に対して何をしてきたのか、そして、いま我々は何をしなければならぬかについて、総合的な推察が可能となるのであろう。

今回は、コロナ関連の問題について、具体的な話に入っていきたい。

共育ちカンガルー日記 (64)

みんなと共に

近藤 みちる

三月はじめ、満開を迎えた梅が町中にその甘い香りを漂わせていた。三年間優希が通った中学校は、遠くに海を見渡せる緑豊かな丘の上にある。この日体育館で、一年を締めくくる恒例行事として合唱祭が催された。新型コロナウイルスが始まって以来、合唱祭の観覧は三年生の保護者に限定されてきたため、私にとってこれが最初で最後の合唱祭の観覧だった。

三月はじめ、満開を迎えた梅が町中にその甘い香りを漂わせていた。三年間優希が通った中学校は、遠くに海を見渡せる緑豊かな丘の上にある。この日体育館で、一年を締めくくる恒例行事として合唱祭が催された。新型コロナウイルスが始まって以来、合唱祭の観覧は三年生の保護者に限定されてきたため、私にとってこれが最初で最後の合唱祭の観覧だった。



お隣の竹林

「お友達のおしゃべりも遊びも、どんどん変わっていった。優希にはよくわからない。ついて行かない。だからもうお友達と一緒にいるのをやめたの」

当時の気持ちを優希が話してくれたのは、その後随分経ってからのことだった。

思い返せば九年前の夏、私たちは就学相談の真つ只中にいた。選択肢はいくつかあった。地域の公立校の普通級か支援級、特別支援学校、統合教育を謳っている小規模な私立校。優希の成長に特別なサポートや配慮は不可欠だろう。手厚いサポートが受けられる特別支援学校や少人数で行き届いた配慮が期待できる私立校は一見魅力に思われた。しかし地域との接点は限られていた。手厚さは期待できずとも、地域の子どもの達ほとんどが通う公立校で、みんなと共に育つ方が、優希の人生において意味があるのではないか。幸い優希の校区は小学校も中学校も一校ずつしかないため、同じメンバーで九年間の義務教育期間を過ごすことができる。パパや祖父

母の母校でもある。悩み抜いた末、私たちは公立校の支援級に優希を通わせる決心をした。大事なことは「どの道を選ぶか」ではなく「選んだ道をどう歩んでいくか」なのだと思います。至ったのである。

こうして優希の学校生活は百二十名の同級生と共にスタートした。選んだ道は決して平坦ではなく、何度も躓き、登校拒否も幾度か経験した。それでも一人、また一人と味方ができ、皆の手を借りて道普請を重ね、何とか前に歩を進めていった。私たちの後ろに確かな足跡が残り、そしてそれこそが優希の人生そのもののなのだと、気づくことができた。

中学もほぼ同じ顔ぶれで揃って入学。だが小学校時代とは違い、子ども達はそれぞれ部活動や塾通いで忙しくなり、思春期も相まったことで、優希と同級生達は日に日に疎遠になっていった。彼らの成長ぶりを見れば、それはごく自然なことであり、私たちももう敢えて「みんなと共に」に拘ることはしなかった。

体育館の窓からは春の光が差し込んでいた。合唱祭が始まると、私の目の前に、思いがけない景色が広がった。優希がクラスメイトと共に、演台に並んだのである。最前列に立ち、真っ直ぐに観客席を見つめていた。しんと静まり返った体育館。やがて指揮者の右手が上がり、ピアノの前奏が流れると、優希は大きく息を吸い、みんなと共に歌い始めた。マスク越しでも口を大きくあけ、一生懸命に歌っているのが見てとれた。

二人で歌えば

懐かしくよみがえる

ふるさとの夕焼けの

優しいあのぬくもり

(竹内まりや)

「いのちの歌」より

混声三部合唱の美しいハーモニーが少しずつ音量を増していく。ふと、彼らが小学校時代には「歌が上手い学年」と称されていたことを思い出した。久しぶりに聴くその歌声はすっかりと大人びて、力強くも優しい響きを湛えていた。みな清々しい面持ちで、

どの瞳にも光が満ち溢れていた。幼かった彼らがこんなにも立派に育ったこと、そしてその中の一人として優希がいることに、私の胸はいっぱいになった。

長らく歌声を封印していた優希が、なぜ今日、この最後の合唱で歌っているのか、私にはわかる気がした。いろいろあったかもしれないが、それも全て含めて、優希はここで紛れもなくみんなと共に育ったのだ。卒業を目前に控え、二度と戻らない今を、彼らは、そして優希は、合唱を通して噛みしめているのだろう。

四月からは、みなそれぞれ

七里が浜の哀歌

いつものようにコーヒーを飲みながらCDで音楽を流していた。

特別に聴こうと思っていた訳ではない。何となく引き出したCDであったが、「早春



土手から大利根を望む

の道を歩み始める。そしてここは彼らの故郷となるのだろう。

セーラーの頸の眩しき卒業歌

みちる

彫刻家 中島 睦雄

賦「冬景色」「青葉の笛」と続いた後で「真白き富士の根」が流れたことに心を動かされた。

「真白き富士の根 緑の江の島 仰ぎ見るも今は涙



猫に会う

帰らぬ十二の 雄々しきみ
魂に 捧げまつる 胸と心
ボートは沈みぬ ちひろの
海原 風も波も小さき腕に
力もつきはて 呼ぶ名は父
母 恨みは深し七里が浜」

この辺りで涙が出てきてしまった。

大分以前に、この歌の物語を聞いたことがあった。事実に基づいた悲話だったこと、そしてその歌をメゾ・ソプラノの小見佳というとても美しい歌声の歌手が東京フィルハーモニー交響楽団に乗せて歌われていたことなどの要素で、本当に素晴らしい様子も、とても悲しい様子が伝わってきたのであった。

それにこの歌は私が子どもの頃、母がよく歌っていたのであった。
母は、大声で話したり大笑いをするような人ではなく、物静かな人であり、その母の小さい声で歌う様子が、子どもながらも悲しさを覚えていたのもあった。

この歌の話は、資料によると1910年1月23日、七里が浜沖で神奈川県逗子開成中学校のボートが転覆し、生徒12名が亡くなったとある。その中には小学生もいた。

当時の逗子開成中学校は校長が海軍将校だったため海軍軍人の子弟が多く通っていた学校であった。

冬の七里が浜の海は急に悪天候になり寒冷な西風に襲われることがあったという。

生徒たちは江ノ島を出るとき漁師に止められたというが、当時の校風がボートを海へと漕ぎ出させたという。ご遺体の中には、中学生の兄が小学生の弟をしつかりと抱きかかえた姿もあったという。「真白き富士の根」はそのような悲しい出来事を綴った

歌であり、その上、私の母が歌っていた様子も重なり、体の芯まで悲しくなってくる。そして歌の終わりにこうある。

「み魂よ何処に 迷いてお
わすか 帰れ早く母の胸に」
悲しい。



渡良瀬遊水池のヨシ焼き見物

プリズムI

佐藤家「悲しい気持ち」

池田 祐子

出会いと別れの時期になりました。光の子どもの家でも卒園する子、退職する職員がいます。

共に過ごした時間の長さに

関わらず「別れ」というものは悲しいものです。
子どもたちが揃った場面で施設長から退職について話がありました。

話を聞いた小2の杉は俯き涙を流していました。

自室に戻ってから泣き続ける杉を暫くは促し、入浴させましたが、湯船に浸かっている間もオイオイ泣いています。

「一生会えないかもしれないだよ！○○さんだって全然来てくれないじゃん！」と以前退職した大好きな職員のこととも言っていました。

「そうだよ。会いに来てくれないのは悲しいよね。」と言うくらいしかできませんでした。

入浴後のドライヤー中、今年度で退職する岩瀬が佐藤家に用事でやって来て、杉の悲しんでいる様子を聞き、杉に「大丈夫。ちゃんと会いに来るから。」と言ってくれました。おかげで杉も少し落ち着いていました。

悲しい気持ちになるのは当然。ちゃんと悲しみましよう。杉と一緒に。

光の子どもの家の事業計画（7） 環境整備委員会

児童指導員 黒川 健一郎

【環境整備とは？】

「環境整備」について調べると、大きく分けて「物」「人」「情報」と3つの環境整備があるとのこと。掘り下げていくと、人が生きていくことの殆どに当て嵌まりそうです。

【環境整備委員会発足】

従来、光の子どもの家の環境整備は「それぞれの家でやる」「気づいた者がやる」だった。現在の職員体制ではやりきれない、見過ごされることもある、ということ、日勤者を中心に生活空間の「物」の環境整備を担当することになった。

【活動の方向性】

とはいえ、生活を外から見て「整備したい」「すべき」「した方がよい」ということがあっても、実際にどうするかは、夕食後から朝食までそこで生活している人たちが決めるのが望ましい。

そこで、委員会はまずそれぞれの家の外の環境整備を扱うことにした。家の中の環境整備は、その家の職員が担当することを基本として、やりきれない部分は委員会に依頼を出してもらおうようにした。委員会から家の職員に整備を提案することもあった。

【これまでの活動】

下の表に、委員会発足後、今年度までに整備した内容をまとめてみた。振り返ってみると、他職員や子どもたちからの気づきや発信、要望等を受けて、委員会はそれをどうにかする実行部隊のように動いてきたものが多かった。気づきの少なから長としての未熟さを感じる一方、光の子どもの家の環境は、光の子どもたちの家に関わる全ての人たちで作っている環境なのだと、改めて感じた。

【園庭の整備】

- 老木の伐採・抜根
- 老朽した枕木を、状態に応じて埋め直し、交換、撤去
- 植木の剪定、刈り込み、芝生の維持
- 動線を検討し、物の配置を見直し、柵の撤去・更新・新設
- 鉄パイプで、鉄棒、ジャングルジム、滑り台のように遊べる遊具を製作
- 砂利の整地
- 自転車置き場整備、輪留めは自作
- 事務所玄関前に緩やかな階段をつくる
- 事務所前の案内板を製作

【各家の整備】

- 原田家、園庭遊びのサッカーボールが窓に当たらないよう柵を設置、ガーデニング再構築、後援会のご支援も賜り現在進行中
- 倉澤家、ダイニング天井高く市販グッズでは食器棚が固定できないため、角材で耐震対策
- 竹花家、増設工事でできたサンルームの熱がダイニングに入って熱いため、すだれを取付

- 各家の要望に応じて、壁の穴、雨漏り、水漏れ、照明などの補修、居室の鍵取り付け

- 各棟の屋根周り清掃、ベランダ等の排水に影響がないように

【ゴミ捨て】

- 本園のゴミは事業ゴミにあたるため、大利根地域の処理場まで軽トラで運搬
- 駐車場に設置したゴミ捨て場を改修・増築、家の中でゴミ袋をためずに済むように
- ゴミの分別指導

【その他】

- 事務棟雨漏り補修、設計士や業者と連携しながら進行中
- 食堂 Wi-Fi 回線補修、既存ルートが事務棟雨漏り原因の一つだった
- センター棟ホール網戸改修、難しい箇所もあり検討しながら進めている
- センター棟排水詰まり対策
- センター脇の通路を整備して幅を広げる、自転車の通りをスムーズに
- 浄化槽管理、清掃

振り返って感じる

公認心理師 岩井 結菜

光の子どもの家に入職して約3年が経ちました。私が児童養護施設で働こうと考えるようになったきっかけは大学院生の時でした。大学で心理学の基礎を学び、そして専門的に学びたいと思い大学院に進学しました。大学院内での実習、高校生への学習支援のボランティアや学童保育クラブのアルバイトを通して子どもたちと関わる機会が増えていき、その関わりの中で将来は子どもに関わる仕事がしたいと思うようになりました。大学院外での実習では様々な領域に行き、その中でも特に児童養護施設の実習を通して、心理場面だけでなく生活場面にも適宜介入していくことによって、より子どもの理解を深めていくことができるということが魅力的だと思いい、卒業後は児童養護施設で働きたいと考えるようになりました。

ご縁があつて光の子どもの家の職員になることができました。入職した頃は新型コロナウイルスが大流行していた時期であり、学校や幼稚園は休校、休園、また、緊急事態宣言の発令、それに伴う外出の制限等、先のないイレギュラーな状況でした。子どもたちは授業をオンラインで受けたり、学校の行事は軒並み中止や延期になったりこれまでまでの日常とは異なる我慢を強いられる生活が続いていました。施設内でも新型コロナウイルスの感染が広がり、症状がなくても隔離せざるを得ない状況が続き、孤独感や不安な気持ちを伝えてくれる子どももたくさんいました。月日が経ち完全に収束はしていませんが、徐々に制限や行動が緩和され、学校での授業も再開し、行事は感染対策をしつかりと行った上で実施できる状況になってきました。

た。光の子どもの家の中でも、配慮しながら行事を行ったり、ボランティアの方の受け入れを再開したり、遠方へ外出をしたりと少しずつ範囲を広げながら再開できるようになっていきました。先日、仙道家へ昼食をいただきに行った時、学習支援のボランティアの方も昼食場面に入ってくださっていました。昼食後、ボランティアの方がウクレレを演奏する音に合わせて歌を歌ってみないかとその場にいた3人の子どもたちを誘って、パプリカときらきら星を歌うことになりました。時折音を止めて確認しながら、息を合わせて笑顔でとても楽しそうに合唱していました。パプリカがカプリカとなつてしまう微笑ましい場面もあり、みんなで合唱している様子を見ていけるとも気持ちちが和みました。合唱後はボランティアの方のご厚意で1人1人にウクレレを貸していただきました。はじめはギターのような持ち方をしてみたり、正座をして腿の上にウクレレを置いて琴のよ

うな弾き方をしてみたりしていました。持ち方や弾き方を教わり、楽しそうに試している顔は、とても輝いていました。相手に合わせながら一緒に歌を歌う、新しいものに触れる経験を通してとても豊かな時間が流れていました。その豊かな時間を作ることできたのは日々の担当者や家の職員、ボランティアの方等の子どもたちへの丁寧な関わりの中で生まれた時間なのだと感じました。そのような関わりを繰り返しながら関係性の基盤を作っていくことによって、子どもたちはいろいろな経験を育んでいけるのではないのかと思います。この3年間を振り返ると、子どもたちの生活が不安定になつてしまふ状況もありましたが、その中でも試行錯誤しながらいろいろな人の支えや関わりの中で子どもたちの生活が守られているのだと改めて実感しました。その中で子どもたちから出てくる様々な表現を受け止めながら寄り添える人となれるよう、自己研鑽していきたいと思ひます。

プリズムII

東仙道家 「それぞれにとつての生活の質」 小西 剛史

年明けから、地域の一軒家を借りて男子グループホームがスタートしました。

慌ただしい準備期間を経て賃貸契約が済んだ年の瀬、2学期を終えたクリスマス・イヴの日に関係する子どもたちへ本園から移動することを伝えました。わたくしは『やったー!』という子どもたちの反応を予想しておりましたが、小川兄弟のそれは目論見から少し外れるものでした。5年前の夏に入所した小川兄弟。当時小4だった兄は施設入所を完全拒否し、まだ状況が掴めず大人に身を委ねるだけの弟龍太（当時4才）を

尻目に、『絶対受け入れまい』と付近の農道を真っ暗になるまで彷徨い続ける……、という初日でした。しかし幸いにもその後は直ぐにここの生活を受け入れ、最後まで受け入れられなかった学校生活においても季節が変わる頃にはスッカリ馴染み、当時のクラスメイトとは今でも深い交流があります。

そんな彼らは入所後これまでの間、生活場所や担当職員が一度も変わることなく5年間を過ごしてきたため、今回の移動はここに来てから初めての経験ということになりました。あの時とは違い生活空間と一部のメンバーのみの変化ではありますが、多少なりとも不安な気持ちがあるのも無理はありません。兄は当

時のように……、とまではいかずとも、「大人に（勝手に）決められるのがイヤなんだ」と、あの時抱いていたものと同じであろう不満を素直に表現しておりました。

一方、あの時の兄と同じ学年になった弟の龍太は移動を聞き「えーっ、イヤだな」と第一声、前向きに迎えられるようにと用意した話の後も不安や戸惑いは拭いきれない様子。しかし新たな拠点を見学した後、翌日には「早く引っ越そうよ!」に切り替わっておりました。

そして正月明けに慌ただしくスタートした新しい生活は2ヶ月を経た現在、ようやく形らしいものになってきました。これまで女性陣に任せきりだった慣れない毎日の食器洗いや洗濯、掃除など……、それらに追われる私を横で見ている龍太の「手伝おつか?」に心救われ、我に返る。

『子どもたちの生活の質を今より少しでも向上させなければ始めた意味が無い』そう自分を戒めスタートした新生活。『しなければならぬ事』

はたくさんありますがイライラせずに、ゆとりを持って、余裕を持って、楽しみながら! そうすれば生活空間が安らぎ、その上にある質の向上へと結びつくはず。伸び代はまだあります!

研修 「境界線（バウンダリー）」 新吉屋 健太

ここ数年、施設外の研修に参加する機会が多くなりました。そこでよく耳にするのが境界線です。

境界線とは、「安心、安全を守る見えないバリア」のことです。これらには「物理的な境界線」、「心理的な境界線」、「性的な境界線」などがあるそうです。

児童養護施設に措置される児童は、何らかの境界線を崩される経験をしていることが多い。そこから、他人の子の部屋に勝手に入る、他人の持ち物を我が物のように扱う、遠慮なく他人の頭や顔を触る、などの行動につながる。とがあるということでした。なんだか妙に腑に落ちたものです。

対応として重要なのは、境

デジタル表示がゆえ



食堂のブロックは、お家になったり、車になったり、恐竜になったり。この日はお城？塔？



中に誰かいます



全体はこうなってます

界線の「共通理解」と「共通認識」だそうです。例えば、パーソナルスペースやプライベートゾーンを教える、目に見えないものを見るように（可視化）する、などです。

先日、他の施設と合同で行う新任研修で、司会をする機会がありました。その時の研修のテーマは「境界線」でした。司会にも話す場面があり、私は「職員同士の境界線を明確にすることが難しい」という話をしました。

これは、他の施設職員の話も聞いたり、自身の経験を振り返って感じたことでした。

続けて、「施設全体としての共通理解・共通認識を明確にすることは困難なことです。せめて同じユニット内だけでも境界線の共通化を図つ

てください。そのために対話をして下さい。」と述べました。これは研修に参加していた人に向けたメッセージであり、それが当たり前になつてほしいと思う私の願いでもありました。どこの児童養護施設の職員も心と時間に余裕がないのは承知しています。ですからまず1日5分からでも「境界線」について話し合ってもらえたら嬉しいのです。

原田家「新人どうし」

染谷 涼花

私が光の子どもの家に就いてから約1年が経ちました。まだまだ分からないことだらけの中、1月末に私が担当をする寅泰が入ってきました。来たばかりで固まっています。お風呂も嫌がついて

た子だけでも、次の日にはすっかり光の子どもの家に馴染み、よくご飯を食べ、よく遊んで、覚束ない足取りで、すぐにあちこち行つては転んだり、いつの間にか怪我をしてきたり……。

そんな寅泰が数日経つ頃には、こちらの話をスルーしたり、「知らない」と言うようになりました。職員全員のことを「しえ、しえんしえん（先生）、しえんしえん（先生）」と呼んでくれたようになり、抱っこやおんぶをせがんでくることもしばしば。家の中では同世代の子とおもちゃの取り合いでケンカもするようにもなりました。自分のおもちゃではない物も「これ

寅泰の」と言つて勝手に使つてしまうことも。

「それは秀明くんなのでしょう」とか「寅泰のじゃないでしょ。元に戻すよ」と言うのと、納得いつていない様子がありつつも、ゆっくりと片付けをしようとする姿もありません。自分の車のおもちゃも、重たいのを自分だけで片付けようとしている姿を見ていると「頑張れ」という気持ちと可愛いと思う気持ちになります。

来たばかりで、不安なことも沢山ある中で、自分の好きなこと、やりたいこと、やって欲しいことを伝えることが出来るようになってきて、成長してきていると実感します。他にも、「ありがとう」「ごめんね」と言えるようになってきたことも成長したなと思います。

私も寅泰もまだまだ分からないこと、大変だと思ふこと、自分の思う通りにならないことが沢山あると思います。がこれからは頑張っていきたいと思ひます。

竹花家「彩と作品展」

田口 貴子

先日、幼稚園で作品展が開かれました。1年間季節ごとに作ってきた作品が各教室に飾られ、保護者と一緒に見て回るという、年間行事の締めくくりです。この日は彩の母も一緒に見て回る事ができたので、各作品のもとへ手を引つ張って案内したり、写真を撮ってとせがんだりして、嬉しそうでした。

鬼のお面やお雛様、こいのぼり等お題が決まっている物から、自分で作りたいものを決め、材料は何を使うか、どのように切るか等それぞれが作り方を考えるもので、幼稚園では幅広く取り組んだようです。もともと絵や工作等、手先を使う作業が好きで、集中して取り組める子でしたが、年長になると出来も良くなりスキルアップしたように感じました。ブドウを作っていた時、なかなか木が立たずに苦労していたようです。それでもできるまで根気強く取り組んでいたとの事。上手に出来ても、出来なくて

も、作っている時間を楽しむことができるのは彩の良い所だと思います。

作品を見て回る中、友達も作品も案内してくれました。日々、○○ちゃんに髪を結わえてもらった、お手紙もらった、○○君と鬼ごっこをした等よく話をしてくれます。お手紙の返事は基本的には書くとしないう子ですが、お返しにアクアビーズでマスコットを作る事もありました。同じ時間を過ごす中、仲の良い子や嫌いな子、様々な関係を築く事が出来たのは彩の力だと思ひ、嬉しく感じました。他の子の作品も見ながら、3年間お友達と幼稚園で過ごしてきた時間を想像しました。楽しい事も、悔しい事も沢山あったようですが、本当に大きく成長したと感じます。

来年度からは小学1年生。様々な経験をするといいです。小さい体ながら、意固地で負けず嫌い。どこまでもマイペース。一方でとてもやさしい彩の良さを存分に発揮して、小学校の生活を楽しんで欲しいと心から願っています。

日誌抄

2022年12月

2023年2月

【2月1日の在籍児童数】

幼児 7名 小学生12名
中学生6名 高校生10名
計 35名

【12月】

4日 第2アドベント礼拝
7日 ページェント練習開始
11日 第3アドベント礼拝
18日 第4アドベント礼拝 & 12月生まれの誕生会
24日 サンタクロース来訪
25日 クリスマス礼拝 ペー
ジェント上映
28日 餅つき 関根栄養士に
よる釣り同好会
31日 大晦日、各々大掃除を
済ませ、本園ではコタツを
出す

【1月】

1日 元旦礼拝 & 祝会 今年
の抱負を発表 卒園生の集
い
9日 新たな分園を開設。旗
井地区にある中古の一軒家
を借り、男子児童4名と小

西副施設長を主な担当として暮らし始める。仙道家から移ったメンバーが多いので、とりあえず「東仙道家(トーセン)」と呼ぶ

14日 達也と新吉屋指導員がD1だじゃれグランプリかぞオーブンに出場

16日 本園施設の改築に向けたワークショップの打ち合わせを、刀川和也氏、田上健一氏、増田政一氏と行う

20日 パントリー

23日 施設内研修、藤岡孝志教授 1月生まれの誕生会

24日 事務棟雨漏り改修開始

28日 今年度のポートレートが完成 食堂に飾る

31日 卒園生の訃報が届く。本園でお別れ会を催すことを決定

【2月】

2日 お別れ会 沢山の方々が来てくださり一緒に故人を偲ぶ

18日 蒼土、コンパスナビの補助を利用して自動車免許取得合宿へ

20日 2月生まれの誕生会

24日 生活物品の寄贈を沢山いただき、卒園生に郵送

【礼拝ご奉仕】 東大宮教会、
木田浩靖牧師、佐々木優牧師
佐野正子牧師

【委員会の主な動き】

運営 来年度の体制を検討
危機管理 避難訓練実施
学習支援 小学生学習会 冬
休み宿題対策
環境整備 雨漏り改修 各ユ
ニットからの依頼に対応
食生活 イベント献立・調理
研修 藤岡教授による施設内
職員研修実施
広報 「光の子」発行
情報・通信 子どものスマホ
購入準備（必要書類の確認、
各通信会社の料金見積）

【実習生】 埼玉県立大学1名
埼玉純真短期大学2名

【元職員の来訪】（敬称略）

牧野由起子 峯寄舞 和田優
右子（ご一家）

【寄贈者各位】（敬称略）

青木勝敏 稲塚由美子 大塚
勉 大塚東一 大橋清栄 岡
本有代 小川 落合洋平 木
暮伸二 坂田喜久江 坂田真
由子 島田一成 高橋和男

高橋幸子 竹林勝子 中島睦
雄 丹羽吉康 根本昌一 浜
田文昭 古川景子 門司一徹
谷口辰夫 山田智・裕子 山
本隆久・英美子 湯澤眞彦

吉村ひろ子 和田優右子
(株)アステック MCMのめぐ
み株式会社 大利根細間郵便
局 大宮前教会 (株)柿沼学園
鴨川会 (株)カーブス 栗原
造園 公益財団法人毎日新聞
東京社会事業団 古河農友会
(株)ゴルフドゥ 埼玉県書店
商業組合 埼玉食鳥肉販売生
活衛生同業組合 CTIフロ
ンティア すくすく広場 全
国シヤンメリー共同組合 全
ヤオコー労働組合 高橋会計
事務所 (株)チュチュアンナ1
%クラブ (株)ティ・エスロジ
ステイクス 富田農園 (株)な
とり 日本鏡餅組合 (財)日本
出版クラブ ネット東埼玉
ネパリ・バザール 東大宮教
会 ほつともっと マルハン
古河店 他多数の皆様

【ボランティア各位】（敬称略）

〈華道〉岡本有代 〈学習支
援〉関口晃司 常松洋介 向
井進 〈施設補修〉栗橋営繕
〈手芸〉山田智 山田裕子

〈訪問美容・理容〉アンスリー
ム 他多数の皆様

光の子どもの家を支える会
からのお知らせ

日頃より光の子どもの家
にお心をつかっていただき
ありがとうございます。

「光の子どもの家を支え
る会」へのご寄付は、確定
申告時に所得控除の対象と
なります。

確実に領収書をお届けで
きるよう、ご寄付の際はご
氏名、ご住所、ご連絡先の
ご記入をお願いします。



初めての美容師さん

ご寄付について（物品の寄贈は事前にお問い合わせください）

【郵便振替】00130-1-128022

他銀行から【銀行名】ゆうちょ銀行 【金融機関コード】9900 【店名】019店
【店番】019 【預金種目】当座 【口座番号】0128022

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277-3
【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【印刷】(株)エル・アートデザイン